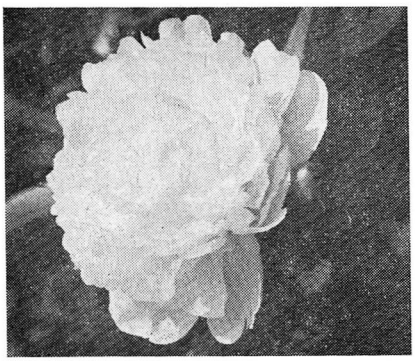
シャクヤクとボタン

北海道大学
原　秀　雄

はじめに――立てば芍薬すわれば牡丹、歩く姿は何とやら。これは言い古された美人の形容、それ程このウマノアシガタ科の低木（ボタン）と多年草（シャクヤク）とは、花の美しいものの中に入れられ、それも只単に美しいと言うばかりか、甚だ濃艶な花と言える存在である。シャクヤクは芍薬の音よみ、芍薬は花の形や色の美しいことから出た名と言い、古くエビスグサ、エビスグスリの名があり、異国渡来の草、また薬の意、ボタンも牡丹の音よみである。

ボタンもシャクヤクも共に大陸から伝来の植物で、シャクヤクは京畿道以北の朝鮮、満洲、江蘇省以北の中国、蒙古、シベリア東部原産の植物で、古く薬草として渡来、その後花に色々の変化を生じ、観賞用に供されるようになったもの。またボタンは中国北西部の原産で、これまた古く渡来した。しからば日本にこれ等の縁者がないかと言うにさにあらず、しかも山中林内に二種を数える。一つは白い花弁五～七片をもつヤマシャクヤク、一つはこれに似て、葉の裏に軟毛を生じ、花弁の淡紅なベニバナヤマシャクヤクである。前者はある文献によると、分布は本州または本州中部以西、四国、九州、朝鮮となっているが、実際には北海道にも見られ、大体札幌附近の山中が北限のようである。葉裏に毛のある一品をケヤマシャクヤクと言う。後者即ちベニバナの方は日本全土、南千島、樺太、それに朝鮮、満洲に分布し、前種と逆に葉裏に毛のない一品を、ケナシベニバナヤマシャクヤクと称え、ヤマシャクヤクにはクサボタン、ボタングサ、ノシャクヤク、ヤマシャクジョウなどの異名があり、ヤマシャクヤクは、茎高五〇㌢以下、ベニバナヤマシャクヤクは六〇㌢内外となり、何れも山草として観賞される。ここに言うヤマは山、即ち山地に生ずる意味である。



シャクヤクについて、さてシャクヤクは前記のようなアジア大陸の各地に自生のものから、栽培品が作出されたと言われ、茎高六〇㌢～一㍍、花は白から桃赤色、花弁は八、またそれ以上、雄しべは多数あり、弁数の多いものは雄しべの弁化したものとみられる。我が国でシャクヤクの名を記された文献は、文安二（一四四五）年の仙伝抄で、その後各種の文献記文に見られ、徳川時代に各種の園芸書が刊行された中で、最も古い延宝九（一六八一）年刊の花壇綱目の下巻に『芍薬珍花異名の事』とあって、三二の品種が記され、『からくれない　大輪也　金山寺　大輪也』など記され、中輪としては、うすきぬ、百まん、種しまの三品種、他の二九種はみな大輪とある。花色、花形などは記してない。降って元禄一一（一六九八）年の花譜中巻に『此花詩経に出たれば、上代より名ある花なり』の書き出しで、『今日本の芍薬凡百余種あり。牡丹を花王として。芍薬を花相（花の大臣の意）とす。其品位牡丹につげり』などとあり、培養の法など記している。寛永六（一七〇九）年の大和本草にも『奥州河沼郡千笑原（チサクノハラ）ニ寿永年中越後ノ城四郎長茂千根ノ芍薬ヲウフ是ニヨッテ千笑原ト云今ニ満原皆芍薬ナリト云是亦自然生ニアラス昔ウヘシナリ云々』とあり、ボタン、シャクヤクの白又は淡紅の花弁を熱湯に通して豆油、酢に和えて食用することを記している。邦内自生のヤマシャクヤクのたぐいも同じく用いられよう。元禄八年の花壇地綿抄にも小車、大えぞ以下五六品種を解説、更にやうきひ、ゆうき白以下品種の名六〇を記し、時代がとぶが、神奈川県農試では、明治末年から育成した品種七〇〇について、昭和七年にその成果を発表している。

他の園芸植物や農作物でも同様だが、シャクヤクにも芽、茎、葉などに色々の変化が見られ、単に花だけに就て見ても一重、翁咲（アネモネ咲）、金しべ、冠咲、手毬咲、半バラ咲、バラ咲、平バラ咲、半八重など各種の花型が見られ、非常に変化に富んでいる。花形の変化は雄しべの弁化と、花弁の数の増加との二つの場合があり、その段階にも色々の程度の差がある。この外二つの花が上下に重なって、一つの花を形

成する場合がある。前記の金しべは雄しべ弁化の最も初期のもの、翁咲、冠咲、手毬咲、バラ咲と弁花が次第に進み、半バラ咲は二花が一つに重なったもの、半八重咲は弁数の増加によるもので、雄しべの数は少なくなるが、雄しべの弁化と見られる痕跡のないもの、平バラ咲では弁の数が更に多くなり、雄しべも時に雌しべもなくなり、従って花は平たくなる。

また中国から欧洲に渡り、手を加えられた一系統がある。セイヨウシャクヤクとよんでいるが、丈が高く、花は濃紅大輪の八重咲である。また別にオランダシャクヤク、一名セイヨウシャクヤクとよぶ、南欧からアジア西部原産の種類があり、これは茎高四〇～六〇糎、シャクヤクより芽立ちが少なく、茎は直立して剛く、枝分れせず、茎頂に一花をつける。葉につやがなく、表面は無毛で緑色、葉裏には多少軟毛があり、花弁は八、紅または帯白で後帯黄に変り、シャクヤクより一〇日位早く開花する。欧洲では古くから知られ、十二世紀末の文献に、すでに観賞植物としての記載があり、早くから八重咲の品種が作られていたと言う。

この外葉が細裂し、三〇～四〇糎の茎の頂に一花をつける。ホソバシャクヤクがある。これは欧洲西部からコーカサス地方の原産、花の色は濃紅又は紫色、花弁の数は八～一〇片で、花径六～八糎、オランダシャクヤクよりさらに早く開花、大正年代に渡来した。他の種類ほどに多く栽培されていない。

ボタンについて――シャクヤクが多年草などに反し、ボタンは落葉低木である。葉は二回羽状をなす複葉、新しい枝の先に花を一個つける。花弁は少なくとも五～一〇枚、八重咲のものは雄しべの弁化により数を増す。花径一五～二五糎になり、花の色は野生品は紫紅色、栽培品にはこの外紅色、淡紅色、朱紅色、暗紅色、紫色、白色などあり、今から四〇年位前、フランスで黄色の品種が作られ渡来したが、本邦で金鵄とよばれるものなどはそれで、金閣、金晃などよぶ品種もあり、何れも黄色の花をつける。しかし中国には昔時より黄色の品種のあった記録があり、現在でも黄花のボタンが見られると言う。

シャクヤクは主に根部を干して薬とするが、ボタンも同じく根を採って木部を去り、五～六糎の長さに切り干したものを牡丹皮とよび、緩下剤、止血、鎮痛などに煎用する。

ボタンの一品にカンボタン（寒牡丹）とよぶものがある。花は小形で紫または白、花径一〇糎内外、冬開花する性質があり、ただそのためには春の蕾をつみ去り、二回目に出た蕾を冬開花させることが必要である。花譜に『冬牡丹あり珍し』とあり、それより前中国から伝来したものと見られる。

ボタンは中国で栽培され、その国民性にマッチした花として発達したが、花卉として扱われ初めたのは、シャクヤクより少し遅れた時代からのことで、木芍薬ともよばれた。花王として重用されたのは、さらにその後のことのようである。古く中国で牡丹と言った植物は今日のボタンではなく、カラタチバナ（タチバナ、コウジ、ヤブコウジ科）であると言われ、本草和名（九二〇年頃）に牡丹のもとに布加美久佐と也末多知波奈の和名があり、また和名類聚抄（延長五年、九二七年）にも布加美久佐としてあるが、也末多知波奈即ちヤマタチバナは、今日のヤブコウジであると言う（古名録）。とすれば本草和名より古い延喜式に牡丹とあるのも、カラタチバナあるいはヤブコウジの類と言えようか。上記の古名録に牡丹の異名として出典を名記した記録があり、それによると、ホウタン（枕草紙）、ホタン（平家物語）トナリグサ（八雲御抄）、照発草、ナトリグサ、廿日草、夜白イロクサ（以上藻塩草）、サヒタツ（言塵集）とあり、ボタンの初めの和名はホウタン（蜻蛉日記、枕草紙）次でホタン（仙伝抄）となったものの如く、仙伝抄は文安二（一四四五）年から天文五（一五三五）年の間に、花の法を伝えた書で、この時代にはホタンと呼んだものであろう。本草綱目に『牡丹は色丹（赤）なる者を以て上と為す。子を結ぶと雖も根上に苗を生ず。ゆえに之を牡丹と謂う』とあり、牡は雄の意、春赤い芽を出すことから言うもののようであると、花木園芸（宮沢文吾）にある。

ボタンは平安朝時代には寺院に盛に植えられ、その風は今日まで続いている。一種の伝統とも言うべきだろう。前記の徳川時代の最初の花に関する書。花壇綱目の巻頭にボタンの図を載せているが、当時多くの花の中で最もすぐれた品とされたためと考えられる。また訓蒙図彙（寛文六（一六六六）年）は、徳川時代に入ってボタンを記した最初の文献とされ、貝原益軒の花譜には、ボタンに関する詳細な記載があり、寒牡丹についても記されていることは前述した。ここに注視したいことは、元禄九（一六九六）年刊の立華訓蒙図彙に『実をうふるに実をつち（槌）にて少うちてひひかし（亀裂を入れる意）うふれは生しやすし又両のはしをといしにて少ときあるひは小刀にて少けつりて水にひさしくひたして後うなれば生しやすし』とあり、また『秋うふれは春生す春生せざれば秋生す春生せすとてすつべからす』との記文である。実際に成熟した種子は直ちに取蒔すれば次の春には発芽するが、遅れてまく程次年春の発芽が不良となり、春発芽しないものはさらに

一年後に発芽、大体同書に記された通りである。

続いて花壇地錦抄、大和本草、草木奇品家雅見、草木錦葉集など植物或は園芸関係の古典に記載のないものはないと言ってよい。明治以来関西地方で多くの品種を作られ、接木に用いる砧木は奈良、兵庫、大阪の各府県で培養されたものが用いられ、これ等は初め薬用の目的で作られたものを、次第に砧として用いるようになったものと言う。また東京近郊でもかなり盛に培養されたことは勿論、全国的に盛に植えられたことは論を待たず、苗木の生産量は国内の需要をみたすにも不足し、国外への輸出なども次第に増加して、仲々に充足し得なかったようである。

シャクヤクの培養法—シャクヤクの好む土質は余り極端なものでない限り、選り好みはないが、壌土が最もよく、砂質土では線虫の害を受け易く、かつ土が乾き気味になり、殊に開花季の天候にもよるが、乾天が続くと、花の質を不良にすることが多い。またこれの植付けは秋、したがって株分けも秋を好季とする。春これを行なうと、その後二〜三年或はそれ以上の間生育不良になり花を着けぬことがある。九月末から十月頃がその時期である。

株分けは株を掘り上げ二〜三芽ずつを一株につけて分割、また株の一部を掘り、必要なだけの小株を切り取ることも一法である。花壇植えにするには八〇〜九〇糎間隔にするが、切花用に植える場合には、畦幅六〇糎、株間四五糎位、とするのが普通で、芽の上三糎位覆土できる深さに植付ける。植付けの前に土を耕すが、その前に堆肥また腐葉土、その他の肥料例えば油粕、米糠、過燐酸石灰等を全面に散布、土にまぜるように耕す。これを植付けの少なくとも二週間位前に行ない。植付けの時草木灰その他のカリ肥料を地表に均等にまいてレーキでかき地表にまぜ、植穴を掘って植付ける。翌春発芽して順調にゆけば蕾をつける。茎頂に一個及びその下に三〜四個の蕾を生じ、花壇などではそのまま開花を待ってよいが、切花用に栽培する場合には、蕾の若い時に頂のもの一個を残して、その下の蕾はすべてつみ去る。

病害には銹病、炭疽病、葉斑病、鼠黴病、疫病、白絹病、褐斑病等知られているが、何れも四斗式ボルドー合剤程度の濃度の銅剤の散布を春発葉直後から夏頃まで時々行なって予防。また被害茎葉の除去焼却を行ない、鼠黴病の予防には、秋末茎葉が枯れてから、石灰硫黄合剤の七〜一〇倍液を、地面に散布することも必要である。

ボタンの培養——壌土または砂質壌土で、排水の比較的よい場所、その上通風良好の陽所を選ぶ。株が横に張るから、将来一尺半位の間隔を保てるように植付けることが必要。植付け場所の準備はシャクヤクと同様、時季も秋だけ、深さ五〇〜六〇糎位耕す。ボタンは接木により育苗するが、これに二種あって、一は共砧（ボタン砧）、一はシャクヤク砧である。共砧の苗は発育がよく寿命も長いが、時に砧芽の出ることがあるのを難とする。シャクヤク砧のものは砧芽の発生はないが、生育は共砧のものより劣るのが常である。ただこの方が鉢植えなどに用いやすい。砧木の養成、接木の方法等については他日のこととし、ただ共砧には株分け砧も実生砧も用いるが、実生砧は最も取扱いやすく、活着もよいことだけを記しておく。毎年早春シャクヤクの項に記したような肥料を施し、生育の途中開花前に配合肥料などを追施する。病害の防除はシャクヤクの項を参照されたい。茎などにカイガラムシ類などの寄生することがあり、六月下旬、七月上旬頃マラソン乳剤、または石灰硫黄合剤の一〇〇倍液などの散布、エカチンあるいはPSP二〇四粒剤の埋施を行ない駆除する。ただ石灰硫黄合剤は高温時に薬害を伴なうことがあるので、夕方など低温の時に散布する。

十月末から十一月初め頃越冬の手当てをする。すなわち枝を縄で巻き、皮筵で包み、その外側に地竹三〜五本立てて囲い、竹の頂を一束に結び、竹を縄で網状にからげる。翌春四月発芽前にこれを外し、直ちに枯枝などを除き、銅剤を散布、また肥料を施す。

牡丹と芍薬

牡丹と芍薬の植込みは十月上中旬が最適です。本秋販売いたします品種と価格は次の通りです。

・牡丹苗

黄金色高級種　一株五〇〇円

金鶏　黄金色で弁輪がやや紅色の万重盛上り咲

金閣　オレンジ色を加味した黄色万重盛上咲

金晃　輝きある黄金色の万重咲きの巨大花　一株三三〇円

特選優良大輪花

赤色系

太陽　純紅色八重咲き大輪花

岩戸鏡　本紅色千重咲き大輪種

日暮　夕陽の如き美しい鮮紅色の八重咲き大輪

桃色系

八千代椿　肉色を加味した桜の色強健種

八重桜　花色は桜色の八重咲きの大輪花

玉芙蓉　上品な淡桃色千重咲きの有名種

白色系

月世界　雪白色の八重咲き大輪花

白神　純白色の万重咲き大輪種

黒紫色系

初鳥　光沢ある黒紅色千重咲きの強健種

花大臣　純牡丹色樹勢強健紫色系の代表花　一株二二〇円

・芍薬

白色系

ファースト　雪白色に紅絞りの八重咲花

ラテンドール　白色万重咲き大輪種

赤色系

ジュビテル　本紅色の盛上り大輪種

ゼネラルマクマイン　濃紅色の盛上り咲き

桃色系

マダム・レ・ガルフォー　桃色より桜色に変る三段咲き

プレニレスフバーバ　桜色万重大輪咲き